

わが国近海に見られる浮遊性巻貝類—II

異足類・ゾウクラゲ科

日本貝類学会名誉会長 奥谷 喬司 (Okutani, Takashi)

第I報(うみうし通信88号)はクチキレウキガイ科を扱ったが、今回はゾウクラゲ科を概説する。

ゾウクラゲ科 **Carinariidae**: 殻は烏帽子型で薄く透明、原殻はほぼ平巻きに近く平滑、後成殻には低い竜骨板がある。成体には蓋は無い。頭部触角を持つ。3属8種知られるが、本邦近海にはこれまでそのうち1種が確認されていない。体は大きく寒天質様で、殻には退縮出来ない。何れの種も黒潮系水の影響のある水域の亜表層でみつかると。

備考:本種の成体は殻の形態、尾の形態など比較的容易に識別が出来る(例外的に1種のみ殻を欠く)。歯舌の差異は少ないが眼を支える黒色体(retina)の形が特に幼若個体を同定する上で重要な標徴となる。姿からも、名前に「クラゲ」と付くところから刺胞動物のクラゲ類と紛らわしい。

1. Carinaria cristata (Linnaeus, 1766)
ゾウクラゲ: 体長60 cmに及ぶ。殻は側面から見ると烏帽子型で後方に反る。殻高は殻口長径の80%を超す。原殻は淡橙色で、竜骨板は低い。眼の黒色体は底辺の広い三角形。尾冠は半月形で殻頂のレベルより僅かに低く、褐色の波状の文様があり、後方鞭状部の断面は多角形で尾端には短い糸状体を持つ。黒潮系水域から太平洋、大西洋、地中海の温熱帯域に分布する。

備考: 屢々体長60 cmを超す個体が漂着採集され、例えば東大三崎臨海実験所、京都大学瀬戸臨海実験所などに保存されているが、多くの場合内臓核が食害されていて殻も残っていないのが常である。本種の完全な殻は得難く、往時のコレクターは、Glass nautilusと呼んで珍品とされていた。

2. Carinaria japonica Okutani, 1955 ヒメゾウクラゲ(図1): 体長8 cmくらい。殻は側面から見るとほぼ二等辺三角形で殻高は殻口長径の約80%で竜骨板は低い。眼の黒色体は底辺の広い三角形。尾

冠は三角形で内臓核と同じくらいの高さに聳える。黒潮域と親潮の間の混合域に棲む。ゾウクラゲ *C. cristata* と似ているので、その亜種または型(forma)として扱っている文献もあるが、ゾウクラゲは更に大型になるほか、殻は後に緩く反る事や、尾冠は半月形で褐色の波状文様がある点で異なる。

備考: 本種は東海区水産研究所(現中央水産研究所)の委託による県担の海洋定線観測の当時、茨城県水産試験場所属の“平和茨城丸”が大洗沖20湊沖から1954年頃に採集したプランクトン標本のなかから見つかった体長62 mmの標本に基づいて記載された(Okutani, 1955)。カリフォルニア海流域では体長15 cmくらいで尾冠の背縁が褐彩する個体も見つかる(Dales, 1952; Okutani, 1961)。新種記載に用いられた標本(ホロタイプ)には殻が失われていたが、後年スクリップス海洋研究所に長期滞在した際、サンフランシスコ沖から採集された体長158 mmの個体に完全な貝殻が保存されていたので補遺記載し(Okutani, 1962)、他種との相違を明確に示した。

3. Carinaria lamarcki Péron & Lesueur, 1810 ラマルクゾウクラゲ(図2): 体長6 cmくらい(地中海産では22 cmの記録がある)。殻は低い帽子型。螺層の初生部は強く後ろに巻き込んでいる。殻高は殻口長径の50%くらい。尾部は太く尾冠は無い。眼の黒色体は底辺の広い三角形。わが国近海では少産。

4. Carinaria challengeri Bonnevie, 1920 コガタゾウクラゲ(図6): 体長3 cmどまり。殻は低い。尾部は短く、尾部の降誕近くに1対の黒色の葉片状器官がある。本来ラマルクゾウクラゲ *C. lamarcki* の亜種として記載された(Bonnevie, 1920)が眼の黒色体は底辺の狭い三角形でラマルクゾウクラゲのそれとは異なる。黒潮系水域に稀産。

備考: 尾部腹面に黒色の葉片を持つので他種とは容易に区別できる。別属のムチ

オゾウクラゲ *Cardiopoda richardi* にも類似した器官が見られるが機能は不明。

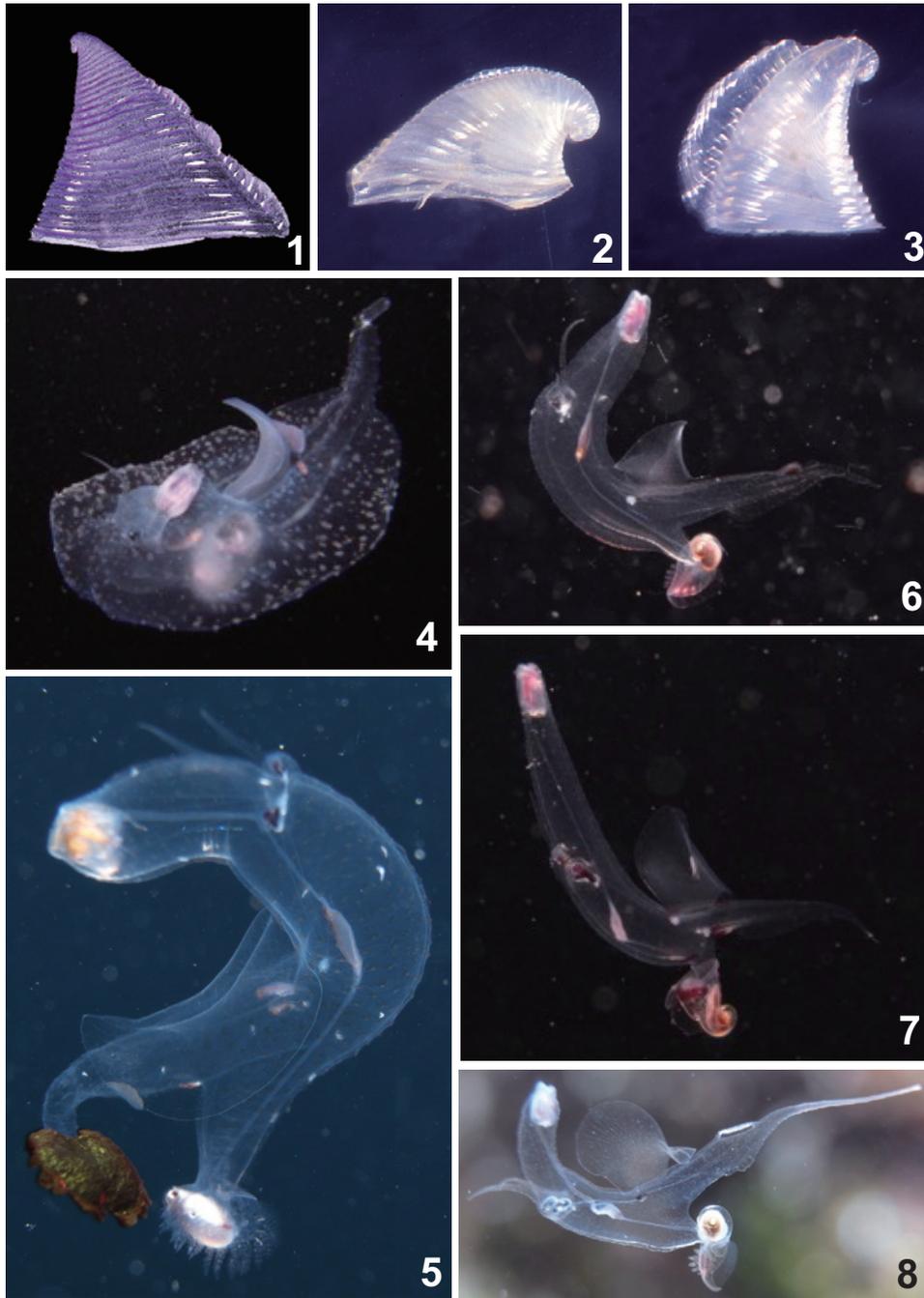
5. Carinaria galea Benson, 1835 カプトゾウクラゲ(図3): 体長5 cm前後。殻は後方に強く反り、竜骨板は高く、原殻は僅かに傾く。尾冠は低い。眼の黒色体は三角形。我が国の暖海域に最も普通。

6. Pterosoma planum Lesson, 1827 コノハゾウクラゲ(図4): 体長7 cmほど。体は円筒形であるが、頭部から尾部の基部まで楕円盤型のゼラチン質の皮層で被われ、その上には微顆粒と小白斑点を散らす。吻は細く、尾部の断面は多角形で後端に付属糸がある。殻は浅い皿型で透明、中央にゾウクラゲ属では竜骨板に相当する稜が走り、後部には巻いた原殻がある。インド・太平洋の温熱帯海域に分布し、我が国の黒潮の影響のある太平洋側で見られる。

7. Cardiopoda placenta (Lesson, 1830) カエデゾウクラゲ(図5): 体長8 cmくらい。吻は中庸で、眼は小さく、黒色体は狭い三角形。皮層は時に鮮やかな橙褐色。内臓核は円卵形で長い柄がある。殻は小さく、約3回巻いた原殻に亜三角形の鏢状の後生殻が付く。20余りの鰓糸は内臓核の周りに鶏冠状に配列する。尾冠は無いが、後端は掌状に拡がる。全世界の温熱帯海域に分布し、我が国の黒潮の影響のある太平洋側に分布するが、極めて稀。

備考: 最近日本近海からの映像が多く見られるようになった。Tokioka (1961)は尾端の掌状の部分は紫褐色と記している。(この部分の形から1965年北隆館発行の「新日本動物図鑑」で時岡 隆先生が和名をつけられたものである。)しかし、生体の映像を見ると、常時掌状に開いているとは限らず粒状や筆の穂先状に収縮しているようであるが、現段階では検討する標本が少ない。

8. Cardiopoda richardi Veyssiére, 1903 ムチオゾウクラゲ(図8): 体長2 cm。小型種で、内臓核は短い柄がある。殻を欠



1. ヒメゾウクラゲ *Carinaria japonica* ; 2. ラマルクゾウクラゲ *Carinaria lamarcki* ; 3. カプトゾウクラゲ *Carinaria galea* ; 4. コノハゾウクラゲ *Pterosoma planum* ; 5. カエデゾウクラゲ *Cardiopoda placenta* ; 6. コガタゾウクラゲ *Carinaria challengereri* ; 7. トガリゾウクラゲと思われる (?) *Carinaria cithara* ; 8. ムチオゾウクラゲ *Cardiopoda richardi*. (4-8 撮影：西巻唯史)

く。鰓糸は8条、尾部腹面に黒色葉片があり、尾部は長い付属糸で終る。我が国の近海では黒潮の影響のある太平洋側に分布する。

付記：日本近海でまだ確認されていない種はトガリゾウクラゲ（新称）*Carinaria cithara* Benson, 1835 (+*procumbens* Tesch, 1949) である。殻は細く高く、高さは殻口長径の175%、殻頂角は約30°。眼の黒色体は円筒形で、右頭部触角を欠く。鹿児島

島で撮影された本種とおぼしき幼若体の映像（図7）があるが標本による確認はされていない。

引用文献(第1報に引用されたものを除く)

Bonnevie, K. 1920. Heteropoda. *Report of the Scientific Results of the "Michael Sars" North Atlantic Deep Sea Expedition, 1910*, 3(2): 3-16.
 Dales, P. 1952. The distribution of some heteropod molluscs off the Pacific coast of North America. *Proceedings of Zoological*

Society of London, 122: 1007-1015.
 Okutani, T. 1955. On a new species of *Carinaria*, *C. japonica*. *Venus: Japanese Journal of Malacology* 18(4): 251-258.
 Okutani, T. 1961. Note on the genus *Carinaria* (Heteropoda) from Japanese and adjacent waters. *Publication from Seto Marine Biological Laboratory*, 9(2): 333-352, pl.12-13.
 Okutani, T. 1962. A supplementary note on the shell of *Carinaria japonica*. *Venus: Japanese Journal of Malacology* 22(1): 82-85.